

松鷹圖

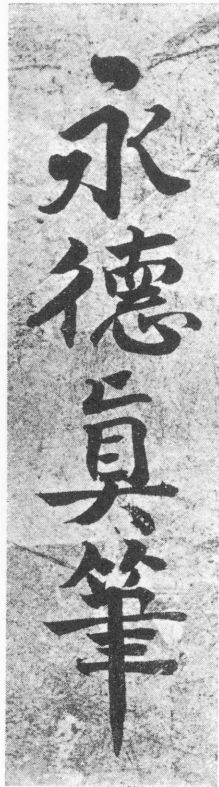
解説

東京美術學校藏

この畫屏は豫てより世上に著聞するもの、いま本誌にも之を登載する機を得た。その圖様は一見して明かな如く山中の清潭に臨んで盤屈する兩株の巨松に各隻を領し、全面唯金箔の地に葉蓋の綠青の飛文様を暖色の枝梢に連ねて、焦點を一雙の鷹に置いた文字通りの金碧畫で、圖様賦色共に省簡にして且つ平明、詢に定型的な桃山屏風とも稱すべきである。唯若し之を他面よりすれば簡明は同時に畫意の一律を含んで、樹石の法の粗放に流るゝ傾があるのみならず、圖様にも左隻の山巔、樹幹、葉頂等に殘雪を配して右隻の色濃き岩頭に相對せしめてはゐるとは云へ、兩隻甚だ相似て、中心たる鷹の配置も、或は故意か、殆んど變化を示さないあたり、畫家の機趣の稱すべきものは或は乏しいかも知れぬ。なほ例へば之をかの帝室博物館藏繪圖屏風が、圖様相近くして而も一々の象形に著しく親昵味を含み、深潭を圍む岩の疊み方にも用意ある事もそれながら、向背の様をも詳かにした樹葉の描寫に之を徴するのに比較すれば、相合して定型化又は裝飾化の極端に近いものゝある事をも知るが、之等の點にも亦桃山屏風の一面の特色は明かにされるに近い。

もと障屏の常、屋舎の裝飾を主として必しも筆意の精密を期するものではない。

松鷹圖左隻永納證書（原寸）



い。若し京洛の名だゝる當代壁障畫の多數が追にそれぞれ意匠の周到が窺はれるとすれば、恐らくは製作の記念的意味の然らしむる所であらうか。偶々もと桂宮御用の御襖であつたと云ふ繪圖の如きもまたその一例かも知れぬ。需要の之に幾倍すると共に畫面の形のより固定した屏風繪が更にも定型化の方向に進み易いのは寧ろ當然であらう。本圖の様式もまたその一、而も徒らに様に依つた禮華の作の就き易きに比すれば、よくその雄壯の風を傳へた好例と云へる。のみならず筆法粗草の譏は永徳すら之を受けた。よくこの簡明の畫調を得た筆者の手腕を思ふなら、手法の細は多くを問ふべきではないかも知れぬ。

唯斯の如き畫致の階梯には當然時代の推移をも併せ考へねばならぬ。而も之を詳かにすることは最も難いが、唯假に概言して永徳に發した放大な圖様が寛永の山樂風に至つて巧密緊確な一態に再び固定したとすれば、本圖の如きは少くも圖樣的にはその中間の一、その圖立、就中樹形の如きも當代諸派に通ずるものとは云へ、大にしては所謂永徳風の範圍に歸し得べく、永納の極また之を物語るものか、些細な點ながら雲金の大柄な曲線と水波線の曲率の少い事も圖様に應じた形式の一と見られなくない。唯冬隻左端の立岩、同隻右上方の笠山等のそれぞれの皴法が、求めれば所謂山樂風のそれに屢々現れて而も遙かに立勝つた手法を示すのに徴して實際の年代は既にそれ等を下とすることも或は多くを妨げないかも知れぬ。なほ訝しきは冬隻右端の叢葉で、只一團の綠青塊に淡墨の點描を加へるあたり、殆んどこの頃の障屏に類例を見難い感がある。茲にあまりに大味な全面の畫趣と共に、やゝ時下つた古態の作とすべきかの疑も湧くが、この壯



大の風が到底この頃を外にしては求め難いと共に既に圖中に永納の極書ある事からも、相當に之を溯るものとせねばなるまい。之を繰返せばこの大味な點も亦桃山畫の一風、よく一世の障屏の汎濫を産んだ所以と解し得るであらう。而も本圖は一般の襖繪に比して保存殊に完好、よく畫法の長短を併せ見るのを幸とするが、唯雲金の縁に配した胡粉隈の大部が剝落し去り、夏隻左端の圓石が骨描を露呈し、また同隻の白鷹の頭部に顯著な補墨のあることを書添へて置く。

厨子屏繪

解説

米國

ボストン美術館藏

東京美術學校藏

東京

内田耕三氏藏

表は落着いた朱漆の地に、全體の均衡からは稍重々しく感ぜられる位に八雙

金物と乳座を打ち、召合せ縁

厨子屏

も大きく、その面取も大まかに、小さいながら如何にも重味ある風情を持ち、裏は棗地に下地漆を施しその上普通の顔料を以て各屏一體宛護法天王と思はれるものを描く。今髹漆專家の見に聞くに、この屏の製法より見て之を支那大陸に於ける製作と見るものと、本邦に於ける普通の製作とするものとの兩説に別れる。しかもその特徴として舉ぐる所が兩説何れも共通であ

るに至つては、我等の如き専門の技法に暗く、且髹漆遺品の多くを精査する機會を有せざる者としてはその何れに適從すべきかに苦しまざるを得ない。唯裏面に描かれた繪畫に就て見るに、その下地漆の上に顔料を以て描出することは、支那中世の遺品にその類例ありや否やを詳かにせぬが、寧ろ本邦に於てかゝるものに關する技法として通途のものである。尊像は何れも海波騒めく中に湧出する岩盤の上に立つ像である。岩盤上跏趺座を布き、頭光を負ふ六體は本邦の儀軌を以て律すれば恐らく十二天に當り他の二尊は龍王と考へられる。圖様から云ふならば海中に湧出する點を最も特異の點とし、技法の細部に就て見るならば、梵天の面貌、毘沙門天の胸甲に見られる人面、毘沙門龜甲の描法、手足の指及爪の特に長く描かれてゐる點等、何れも本邦傳來の形相としては甚だ特異とすべきで、唯尊名を擬定するに假に本邦在來の儀軌、圖像を以てすれば、

東京美術學校所藏のものを風天、毘沙門天、内田耕三氏所藏のものを火天、炎

東京美術學校藏

摩天、ボストン美術館所藏のもの

を伊舍那天、帝釋天及難陀、跋難陀の二龍王と判じ得べく、その細部に互つて假令小異はありとしても、本邦傳來の儀軌を以てかく的確に判定し得ることは、この畫を支那製と考ふべく甚だ不可思議とすべき點である。この畫を假に日本に於ける製作と考ふるならばその稍鈍重なる描法、軀幹の動きの固定化せる點、波頭の稍形式的なる描出等より見て當然足利期に入れる頃の製作と見るべく、之を大陸に於ける製作と考ふれば、かの